

敷田 麻実

③ ナホトカ号事故
から幾年ぞ(1)

食ふんざいば

題字は五木寛之氏

ナホトカ号が1997年
の正月に島根県沖合で沈没
し、そこから大量の重油が
流れたのはもはや6年半前

なしたつもりだったが、中
でもこのナホトカ号事故
は、自分の仕事の重要性や
意味を思い知らされた「で
ネットが活躍した。携帯電

でやっとほじまったばかり
だった。幸運にも水産課で
は、前年の国際シンポジウ
ムのために、すでにインタ
ーネットに接続していた。
オイルスピル(油流出)
で検索すると、エクソンバ
ルディーズ号の記録のホー
ムページが見つかる。事故
を経験した今では誰もが知
っているが、油が固形化し

情報源
ネットが活躍

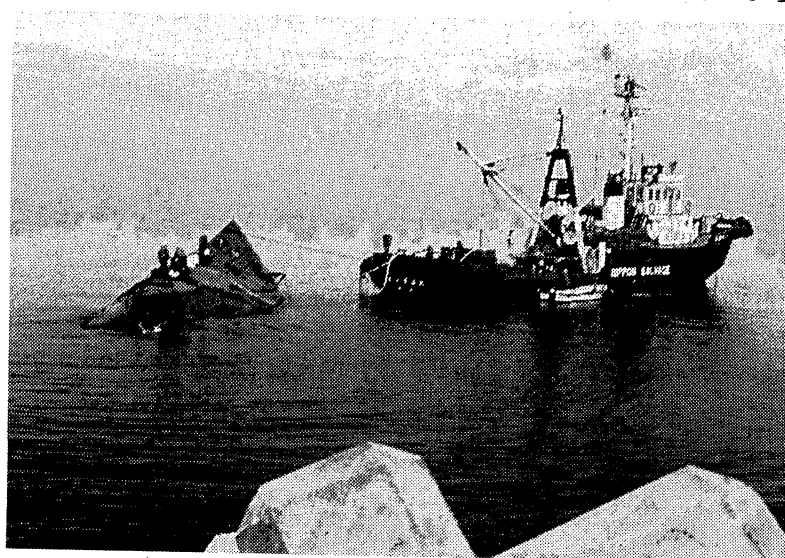
の話である。時が流れ、世
紀が変わってしまったこと
もあり、日に日にナホトカ
号の記憶は忘れ去られてゆ
くように感じる。15年間の
県庁勤務では、大きな仕事
や困難な仕事をいくつもこ

の語である。時が流れ、世
紀が変わってしまったこと
もあり、日に日にナホトカ
号の記憶は忘れ去られてゆ
くように感じる。15年間の
県庁勤務では、大きな仕事
や困難な仕事をいくつもこ

話でメールがやり取りでき
る今では当たり前なことか
もしれないが、ナホトカ号
事故の際には、インターネ
ットが貴重な情報源になっ
た。当時、県のインターネッ
トへの接続は、情報政策課

て扱いにくくなることや、
揮発成分の消失と同時に毒
性も減少することなどが、
手に取るようにわかった。
この情報のおかげで、その
後の対策でどれだけ冷静な
判断ができたかしかない。

ナホトカ号事故の対策で
は、いくつもの「山」を経
験したが、なかでも分散
散剤は一定の効果はある



重油流出事故を起こしたナ
ホトカ号の船首部分の引き
上げ作業。97年3月、福井
県三国町で(敷田さん提
供)

が、その影響も否定できな
い。このような「灰色」の
薬剤を使うか使わないかと
いう判断で、「使う側」が
主張するのは「有害性が科
学的に証明できないのだか
ら、使用を止められない」
という論理だ。また「証明
できない危険性で、経済的
な価値を損なうことはでき
ない」という責任論が出て
くることも多い。いずれ
も、正当な論理に思える
が、過去の公害病や最近の
狂牛病問題の例を見れば、
それが「まやかし」である
ことは明らかだろう。
(金沢工業大学教授)